様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：３３９０６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ１１２７６

研究課題名（和文）認知症看護におけるケアリング・アプローチの開発と検証：介護への展開を見据えて

研究課題名（英文）Development and validation of the caring approach in dementia nursing: Toward expansion to caregivers

研究代表者
小松　美砂（Komatsu, Misa）

椙山女学園大学・看護学部・教授

研究者番号：００３６２３３５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　一般病床を有する医療機関3施設の4病棟において，看護師111名およびケアワーカー23名，計134名を対象に，ケアリング・アプローチに関する説明会を行い，その前後にアンケート調査を行った。また，各病棟においてケアリング・アプローチを用いた実践を1ヵ月程度実施し，終了後に各病棟4～７名にフォーカスグループインタビューを行った。
　有効回答129（有効回答率96.3%）を分析対象とし，説明会前後のアンケート結果をWilcoxonの符号順位検定を用いた結果，認知症高齢者との関係形成に影響する実践の3項目と，認知症高齢者とのケアに関する8項目について，実施前よりも実施後に肯定的な変化がみられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　研究結果として，ケアリング・アプローチの活用によって，認知症高齢者との関係形成に影響する実践や，認知症高齢者とのケアに関する経験や思いについて，ケアリング・アプローチを活用する前より，活用後の方が肯定的な変化が生じたことが示された。
　これらの結果より，研究チームが開発した「看護職者と認知症高齢者間の相補的ケアリングモデル」は，看護職者だけでなく介護職者も含めたケア提供者に活用することができ，一般病院における認知症高齢者とケア提供者の関係形成に一定の効果があることが検証された。

研究成果の概要（英文）：A total of 134 participants (111 nurses and 23 caregivers) working in four wards across three medical facilities with general hospital beds were provided with a teaching session about the caring approach. The participants completed a questionnaire before and after this session on their practices and their relationships with the older dementia patients. At the end of the month, the participants engaged in focus groups led by the researchers, with four to seven participants per ward.
Participant responses to the questionnaires completed before and after the teaching session were analyzed using the Wilcoxon’s signed-rank test. The questionnaires of 129 of the participants were valid responses (96.3% valid response rate) and these were included in our quantitative analysis. We found evidence of positive changes in three practices relevant to carer;patient relationships after the implementation of the caring approach and for eight questionnaire items.

研究分野：老年看護学

キーワード：高齢者　認知症　ケアリング

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

日本における認知症高齢者への対策として，令和元年 6 月に認知症施策推進関係閣僚会議が「認知症施策推進大綱」をとりまとめ，認知症になっても住み慣れた地域で自分らしく暮らし続けるための取組が進められている。認知症の特徴は，疾患により認知機能が低下し日常生活に支障をきたすという点にあり，特に認知症の行動・心理症状によって看護や介護に困難さが生じやすいことが課題となっている。

認知症高齢者のケアを困難で終わらせず，より良いケアを提供するためには，認知症高齢者との関係性の構築が重要となる。認知症高齢者との関係性を構築するために，看護職者は効果的なコミュニケーションを行う必要があるが（Kilgore,2015），認知症高齢者のコミュニケーション障害が信頼関係の構築を難しくする要因の一つとなっている（千田他,2014）。近年は，対応が困難な症状を呈する認知症高齢者とのコミュニケーション法を学ぶための看護師用 e-ラーニング教材も開発されているが（青柳他,2017），看護職者のコミュニケーション力を高めるだけでは，看護職者側からの一方的な働きかけに留まるおそれがあり，認知症高齢者と双方向の関係性が構築されるとは限らない。

そこで，本研究は認知症高齢者と看護職者の関係性を双方向から捉えるために，ケアリングに着目した。本研究においてはケアリングを，ケアする人・ケアされる人に生じる変化とともに，双方が成長発達をとげる関係とする（メイヤロフ,1987）。本研究チームは先行研究において，看護職者が認知症ケアにやりがいや達成感を感じ，ケアを通して認知症高齢者から得る体験をしていたことを明らかにした（小松ら，2017）。また，認知症高齢者と看護職者間の相補的なケアリングモデルを開発した（Komatsu et al,2021)。

２．研究の目的

本研究ではこれまでの研究結果をふまえ，ケアリングモデルを臨地において活用する上で必要となる具体的なアプローチの手法を示し，看護職者だけでなく介護職者を含めた研究参加者に対するアクションリサーチを通じて，ケアリング・アプローチの効果を明確化することを目的とした。

３．研究の方法

研究実施前にケアリング･アプローチの具体的な手法について，既に行った研究成果をふまえ，共同研究者間で協議し抽出した。次に，機縁法により依頼した一般病床を有する医療機関 3 施設 4 病棟を対象とし，認知症高齢者へのケアを実践している看護師 111 名およびケアワーカー23 名，計 134 名を研究参加者とした。認知症看護認定看護師および老年看護専門看護師等も対象に含め，外来・手術室・集中治療室（ICU，CCU，NCU，SCU，HCU，NICU などケアユニットとして単独の病棟）・小児科・産科の看護師およびケアワーカーは，認知症高齢者のケアに携わっていない，もしくは携わる頻度が低いため対象から除いた。データ収集は 2021 年 8 月から 2022 年 6 月に行った。研究の流れは，1）課題の検討，2）事前アンケート，3）ケアリング・アプローチに関する説明会の実施，4）ケアリング・アプローチの実践，5）事後アンケート，6）研究参加者へのフォーカスグループインタビューにより構成した。最初に，研究参加者のうち中心となるリサーチグループメンバーを募り（2～5 名），リサーチグループメンバーと共に，当該病棟が抱える認知症高齢者へのケアにおける課題を検討した。次に，事前アンケートを実施し，その後に対象施設において説明会を対面もしくはオンラインで実施した。

説明会の内容は，各施設（病棟）が抱える課題の共有，ケアリングおよびケアリング・アプローチに関する説明，研究に関する説明とした。説明会の所要時間は 30 分～1 時間程度とし，認知症ケアに関する説明を加えるなど，対象施設の要望に応じて調整した。説明会終了後 1 か月間，対象病棟において研究参加者にケアリング・アプローチを意識して認知症ケアを実践してもらった。1 か月を目途に実践状況をリサーチグループと共有し，継続の必要性について検討した。実践終了後に事後アンケートを行い，4～7 名の研究参加者にフォーカスグループインタビューを実施した。

事前･事後アンケートの回答所要時間は 10 分程度であり，基本的属性，年齢（年代より選択），職種，現職種での経験年数および認知症ケアに携わっている年数，過去 5 年間に認知症ケアに関する院外の研修を受けた経験，認知症の人との同居経験について質問項目を設定した。また，ケアリングに関する質問項目として，研究者らが抽出した認知症高齢者とのケアリング・アプローチの実践項目 37 項目を用いた。質問項目には，認知症高齢者との関係形成につながるケア提供者の行為、ケア提供者との関係形成につながる認知症高齢者の行為、認知症高齢者との関係形成によるケア提供者の変化，ケア提供者との関係形成による認知症高齢者の変化等を含めた。作成した質問項目は因子分析を行い，内的整合性を確認した（Cronbach α= 0.918）。その他に認知症高齢者との交流を通じた感想，日頃の業務において感じる課題等の自由記述欄を設けた。アンケート結果はリッカート尺度項目を得点化し，正規性に準じて対応のある t 検定もしくは Wilcoxon の符号順位検定等を行った。統計解析には IBM SPSS Statistics 28 を使用した。

４．研究成果

事前・事後アンケートの両方を回答した有効回答 129（有効回答率 96.3%）を分析対象とした。職種は看護職者 109 名，介護職者 20 名であり，年齢は 25 歳以下 32 名（24.8%），26 歳以上 30 歳未満 19 名（14.7%），30 歳以上 40 歳未満 23 名（17.6%），40 歳以上 50 歳未満 37 名（28.7%），50 歳以上 18 名（14.0%）であった。また，現在の職種での平均経験年数は 11.08±9.07 年であり，認知症ケアの平均経験年数は 8.07±7.20 年であった。

認知症高齢者との関係形成に影響するケアの実践状況について 17 項目を設定し，「行っている：4」「時々行っている：3」「あまり行っていない：2」「全く行っていない：1」によって得点化した。ケアリングに関する説明会の実施前と実施後の回答状況をみるため，実施前と実施後の 2 群間の差を Wilcoxon の符号順位検定を行い，$p<0.05$ を統計的有意差ありと判断した。その結果，認知症高齢者との関係形成に影響する実践について，質問項目「認知症看護に関してケア提供者以外のスタッフ(医師,薬剤師,療法士等)と情報共有しながらケアを行っている(p＝.033)」，「認知症高齢者の家族が，在宅ケアを継続できるよう支援している（p＝.043)」,「他の患者と会話や交流があるかなど,認知症高齢者と他の患者との関係性に注目しケアを行っている(p=.001)」の 3 項目について，ケアリングに関する説明会の実施前よりも実施後に有意に変化がみられた。

また，認知症高齢者へのケアに関する経験や思いについて 20 項目を設定し，「そう思う：4」「ややそう思う：3」「あまり思わない：2」「全く思わない：1」によって得点化した。ケアリングに関する勉強会の実施前と実施後の回答状況をみるため，実施前と実施後の 2 群間の差について Wilcoxon の符号順位検定を行い，$p<0.05$ を統計的有意差ありと判断した。その結果，質問項目「自分が関わることによって，認知症高齢者が笑顔になることが多い（p＝.003)」,「自分が関わることによって，認知症高齢者が安定し、落ち着いた状態になることが多い（p＝.004)」，「自分が関わることによって，認知症高齢者が入院生活になじむようになることが多い（p＝.004)」,「他のケア提供者に比べ自分は認知症高齢者に頼りにされていると感じる(p＝.023)」，「認知症高齢者から,“食事は食べないのか”“寒くないか”など，心遣いをされる（p＝.034)」，「認知症高齢者に受け入れられたと感じると，仕事への意欲がわく（p＝.019)」,「自分が行った認知症ケアについて振り返ることが，自信や自己成長につながっている（p<.001)」,「認知症高齢者とのかかわりを通して得たことは,仕事以外の日常生活にも生かすことができる(p＝.004)」の 8 項目について、ケアリングに関する説明会の実施前よりも実施後に有意に変化がみられた。

さらに，認知症高齢者とのケアリング・アプローチを用いた介入の成果として，認知症高齢者とのケアリング関係を示す質問項目（計 37 項目）を得点化し，介入による変化を検討するため，ケアリングに関する説明会実施前および実施後の合計得点の違いについて，対応サンプルによる Wilcoxon の符号順位検定を行い，前後比較を行った。その結果，ケアリング得点の平均値は 101.29±12.61 から 104.52±12.12 点に有意に上昇した（p＝.001)。

ケアリング・アプローチを用いてケアを実践したことへの感想として記載された自由記述の概要は次のとおりである（表１)。

表１　ケアリング・アプローチを用いた実践に対する感想

意識することで対応する時，余裕をもって行動できている様に思った。
日々の業務や関わりに対してやりがいを感じることができた。
認知症高齢者からかけられる言葉をよく聞こうと思えるようになった。
気持ちに余裕をもって対応しようと心がけた。やさしく話しかける様に心がけた。
以前よりもっと丁寧な言葉掛け，表情をよくするなど心掛けをしている。
忙しい時でも気持ちに余裕を持ってかかわろうと思った。
病棟の各場所に認知症のケアを大切になどの貼り紙などをしてくれて,意識して関わることができたと思う。
他職種の方より部署での患者さんへのかかわりが穏やかですねといわれた。
認知症高齢者に積極的に関わるようにしているが,勤務が忙しくなると積極的に関われず口調も強くなる自分がいることがあり反省することも多い。今後の課題として，忙しい時でも心に余裕を持って対応できるようにしたい。

上記のとおり，認知症高齢者とケア提供者間のケアリング・アプローチは，一般病院において認知症高齢者と看護職者および介護職者の関係形成に一定の効果があることが示された。国内外の認知症ケアに関する先行研究において，ケアリングに基づくアプローチの検証はなされていないため，本研究は新規性及び独自の視点を有する成果を得られたと考える。また，フォーカスグループインタビューにおいて，表１と同様の感想とともに今後の課題も示されたため，次の研究課題につなげ継続して取り組みたいと考える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 Misa Komatsu,Seisuke Hayakawa,Norikazu Ohnishi,Kazunari Takemura,Makoto Tabata,Ritsuko Shimizu	４．巻 24(4)
２．論文標題 Developing a Cooperative Caring Model for Nurses and Older Adults With Dementia	５．発行年 2021年
３．雑誌名 International Journal for Human Caring	６．最初と最後の頁 290-297
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20467/HumanCaring-D-20-00016	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	早川　正祐 (Hayakawa Seisuke) (60587765)	東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・特任准教授 (12601)	
研究分担者	大西　範和 (Ohnishi Norikazu) (20176952)	三重県立看護大学・看護学部・教授 (24102)	
研究分担者	竹村　和誠 (Takemura Kazunari) (90779951)	三重県立看護大学・看護学部・助教 (24102)	
研究分担者	田端　真 (Tabata Makoto) (20746359)	三重県立看護大学・看護学部・助教 (24102)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	清水　律子 (Shimizu Ritsuko) (70593515)	三重県立看護大学・看護学部・講師 (24102)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関